

本日は、短時間ではありますがよろしくお願ひいたします。

「障害者」の地域での自立生活を考えるとといった趣旨のフォーラムでありますので、私が「一人暮らし」を始めた動機と「充実した自立生活を送るため」に必要なと感じていることをお話できればと思っております。

## 1 一人暮らしを始めた動機

全寮制の播磨養護学校の高等部を卒業してから通信制の大学に進学するまでの3年間、実家近くの社協が運営する障害者のデイサービスに通所していました。

そこでは朝、各家庭に送迎車で迎えに来られて、1日リハビリや絵画や音楽活動などの創作活動を楽しみながら平穏に過ごし、また夕方送迎車で各家庭に送られるといった日々がありました。

当事者の両親が健在なときはいいのですが、いざ両親が高齢になって毎日の介助が困難になると赤穂・加古川などの遠方の入所施設にしぶしぶ入所させられるケースを何件か目のあたりにさせられました。

「このままここで毎日平穏な生活を送っていたら、大学に行ったり仕事をしている同級生から取り残されたり、近い将来私もきっと遠方の入所施設に入れられる」と19歳ながらも危機感を詰まらせ、先が何も見えなくなるほどの暗闇に包まれました。

そのとき縁があり、今は亡き重度の脳性麻痺の障害をもつ恩師の大学教授と出会い、「私も福祉やパソコン系の仕事ならできるかも」と元気をもらい、恩師の先生の勧めで京都にて「一人暮らし」を始め佛敎大学の通信課程で社会福祉を学びながら、平日はパソコンの作業所に通所し、ホームページの制作や名刺、カレンダーの印刷業務を通じて、パソコンの技術の基礎や今の仕事や生活の基盤を築いてきました。

私たち重度障害者にとって「親亡き後どう生きるか」は「施設入所」か「一人暮らし」か人生の選択を余儀なくされるほどの死活問題でもあると感じています。

だからこそ親が元気で健在なうちに、親以外のヘルパーなどの他人の介助になれたり、青年期から一人暮らしを実践しながら可能であれば、自分自身もつ能力を最大限活かせるような職種に就いたり、作業所や趣味のサークルなどの自分の居場所を見つけ、「親亡き後」の生活基盤をしっかりと立てていくことが大事ではないかと考えています。

## 2 充実した地域生活を送るためには

ノーマライゼーションの思想や障害者の自立生活運動の価値観より、医療ケアや重度訪問介護などの介助サービスを受けながら入所施設や実家から出て街なかで自立生活を始める仲間が増えました。

私たち重度障害者が地域で自立生活をするためには、障害者年金・生活保護の所得保障や医療・介助サービスなどの福祉制度の充実は必要不可欠なのですが、私的には施設や実家から出て一人暮らしを始めたあと「日中はどのように過ごし、どんな生活スタイルをしていくのか」と考えて組み立てていくことが大事だと思っています。

障害者雇用促進法や障害者総合福祉法よりA型・B型の作業所や地活センターなどの日中活動の場が整備されても、どうしても障害の程度が重度であるほど会社や施設の整備面や介助のマンパワー不足などが理由で受け入れてもらえにくいことが現状にあり、たいていの自立生活を送っている重度障害者は、毎日自宅でヘルパーと変わらない日々を過ごしている人が多いという現実があります。

やっぱり人間は、「朝起きて日中は働いたり、何だかの活動をして体を動かし、夜は寝る」といったラ

イフスタイルを繰り返す習性を持っていると思うので、地域で充実した自立生活を送っていくためには日中、会社や作業所に通って働いたり、地活センターやリハビリ施設などに行って自分自身の生活力を高めたりすることが大切だと「パソコン工房」に通所している所員さんと接したり、私自身の日々の生活の中で感じています。

パソコン工房に現在、通所されている所員さんのなかで、発語することも漢字やカタカナの読み書きが困難な失語症の障害を抱える所員のAさんがおられます。

以前は清掃業務をされている就労支援施設に通っておられたらしいのですが、「足腰が悪くなったので、パソコンを覚えて、いくいくは事務仕事に就きたい」と娘さんと相談しに来られたのが、通所されるきっかけでした。

入所された当初は、パソコンに触れたことさえない全くのパソコン初心者でマウス操作もキーボードでの文字入力も困難で、その上でAさんの障害の特性で対話によるコミュニケーションも難しく市販のテキストでの指導も困難だったので、何度もスタッフ間で議論して受け入れることを断ることも考えていました。

私自身も大学生の就職活動のとき「重度な障害があるから」と言われて面接さえも、応じてくれない一般企業も何十社とあり、かなり苦い思いをしてきました。

「そんな私が、Aさんのこと見放してしまう訳にはいけない」と思い、Aさんとの毎日の研修の中で試行錯誤を繰り返しながらフリガナ付きのAさんの習熟度に応じたA3サイズのオリジナルテキストを作って、マンツーマンでゆっくり指導する研修方法にたどり着きました。

今では、Wordで作成した文書の中にイラストを入れるまでに上達されました。Aさんとともに「できた」と言って喜び合っている毎日です。

このように、重度障害者としっかり向き合って、就労や日中活動をサポートしてくれる企業や就労支援施設やリハビリ施設が増えると重度障害者の地域での自立生活もより充実したものになるのではないかと考えています。

そのことを障害当事者の一人の施設長として、多くの方々に発信していけたらと思っています。

ご清聴ありがとうございました。